

# 江戸の春

今のように、庶民が桜を楽しみ始めたのはどうやら江戸の時代のことのようでございます。

当時、花見や宴会の余興として長唄などがしきりに演奏されていたようで、この季節伴奏をする三味線の弾き手が足りなくなると、いわゆるお師匠さんではなく、若い演奏者にも声がかかったようでございます。

あちらこちらで聞こえる花見客の笑い声や、三味の音。合間を縫うように鶯の鳴き。

そんな江戸の街の春の一幕でございます。

まだ名もなく若い「三味弾き」の松吉は、長唄屋という料理屋と宴会場が合わさったような店の二階で、窓枠の格子を器用に抜き取り、そこに腰を掛けると毎日春風に吹かれながら何を見るでもなく、一階の宴会席から声がかかるまで、店の者の目を盗んでは酒を飲んでおりました。

一階では、まだ明るいうちからすっかり良い気分になった酔客たちの笑い声が響き、店前では、やはりどこやらで花見をすましたらしい酔っ払いたちが行きかっっておりまして、その喧噪の中をすぐ近くの反物屋で奉公しておりますおみつという娘が、この男たちに軽口をたたかれながら、お得意さんに品物を届けようと急いでおります。

酔っ払いの軽口には動じないこのおみつですが、二階の松吉を見つけるといつもなぜかうつむいて小走りで店を通り過ぎるのでございます。

そしてこの娘、松吉にお呼びがかかり、一階の宴会席で三味線を弾いているときには、小走りをやめ、わざとゆっくりと歩いて、その音曲を聴きながら、店の中を盗み見しながら通るのでございます。

さて、そのようなきやかな日が幾日ほど経ちましたでしょうか、やがて花見や宴会も下火になりはじめ、桜もそろそろ春の嵐に散り始めるころ、例によって長唄屋の前をいそいそと通るおみつの姿がございました。

その日は東から生暖かい強い風が吹いておりまして、風に揺れる前髪を押さえながら、おみつがいつものように二階の窓枠を盗み見いたしますと、松吉がおりません。かといって一階の宴会場からも音曲が聞こえてまいりません。

おみつはこの日初めて店先で足を止めて、暫く長唄屋の前で、松吉の三味線の音を探っておりますが、やはりその姿と同じように探すことはできません。

なぜか急に不安になりまして、おみつが長唄屋の番台をそつと覗き込みますと、暖簾の奥にいた番頭さんと目が合つてしまいます。

「何かご用？」

番頭さんが腰をうかします。

何も言えずに立ち尽くすおみつの目の前に、暖簾を分けた番頭さんが、ぬつとそのみように長い顔突き出しますと、

「あ、あの、」

とおみつは思わず逃げ出したくなります。

そんなおみつにおかまいなく、

「おや、反物の届け物かい」

と、番頭さんがおみつの持つている男物の反物をしげしげと眺めますと、

「うちでこんな反物を着るやつは、三味弾きの松吉ぐれいもののだが、あいにく今日はいねえよ」

と、かつてに勘違いをしております。

おみつが何を言つて良いかわからず、困つておたおたとしておりますと、またまた早とちりをしている番頭さんが

「あいつは日頃の大酒がたたつて、おとといから寝込んでるのよ、こつちはかわりの三味

を探すのに大騒ぎだぜ。まったく金もねえくせに、毎日酒くらって、おまけにこんな上物の反物なんぞ注文していい身分だぜ、まったくよ」

と、いまいましそうに舌打ちをいたします。

「野郎に届けるなら、その神社の脇の細い通りをまっつぐ行った長屋の一番手前の部屋だ」

と、この番頭さん、頼みもしないのに松吉の家までおみつに教える始末です。

しばらくポカンと立っていたおみつですが、ヒュンとなった東風に我に返り、番頭さんにペこりと頭を下げますと、なにもなかったようにお得意様に反物を届けに歩き出します。

「松吉さんというんだ」

おみつはこの時初めて松吉の名を知りました。

なにか一歩松吉に近づいたようで、嬉しい反面、番頭さんが言っていたように体をこわしていると聞いてだんだんと心配になってまいります。

無事反物を届け終わったおみつは、その見事な桜並木に誘われるように、教わった神社の脇の一本道を無意識のうちに歩いておりました。

上を見れば、見事な桜の木が道を覆っておりますが、どうやらおみつには目に入らぬようでご覧います。

やがて番頭さんが言っていたとおり、砂利道の先に貧相な長屋が現れます。

おみつは歩を緩めて、一旦立ち止まりますと、この時初めて自分のしていることが、何かおそろしいことのように感じたのでございします。

「やっぱり早くお店にもどらなければ。旦那さんが心配なさる」

そう思い直して、くるりと今きた道をひきかえそうとした、ちょうどそのとき、どこやらから三味線の音が聞こえてまいりました。

それはゆったりとした長唄の伴奏とちがひ、テンポの速い激しい音曲で、のちにいわゆる津軽三味線と呼ばれる独奏ものでございましたが、おみつにはすぐにその音が長唄屋の外でいつも聞いている三味線の音色だとわかります。

そしてそれは紛れもなく、松吉の三味線でございました。

松吉は以前、東北地方から廻ってきた旅芸人の三味線に魅せられ、無理やり頼み込んでその技を教わつて以来、長唄でお呼びがかからぬ時など一人で稽古をしていたのでございます。

しばらくの間、立ちすくんで、その激しい旋律を聴いていたおみつは、やがて夢遊病のようにふらふらと音が聞こえてくる長屋の方へ再び吸い寄せられて行きます。

気がつけば、長屋の一番手前の松吉の部屋の引き戸の前で、おみつはその三味線の音にすっかり捕えられ、身動きできなくなつていたのでございます。

「あれま、松吉になんか用かね」

突然の凶太い女の声に、飛び上がるほど驚いたおみつがふりかえりますと、そこには幼子をおぶつた浅黒い女が、洗濯物を手にしてこちらをうかがつておりました。

松吉に女房、その上赤児までいるとは露とも思わなかつたおみつは呆然としますが、次のおんなの態度でそれが思い違いだとさとります。

「なんだよ、芸妓かなんかを引つ張り込むのかと思つたら、まだ生娘じゃないか。飲み過ぎて倒れたつていうのに、松吉もすみにおけないねえ」

と、にこりともしないでぶつぶつ言いますと、今度はいきなり

「おい、松！お客さんだよ、こんなべつぴんさんを外に立たせておくんじゃないよ！」

と、いきなり目の前の引き戸をガラリと開けてしまいます。

引き戸の奥では、四畳一間の万年床の上で、少々げつそりとした松吉が何事かとバチを止めて顔を上げます。

「あんたも変わりもんだね、こんな大酒飲みの三味弾き屋のところにわざわざ訪ねてくるなんて」

女はおみつを穴のあくほど眺めてから、今度は首を伸ばして、中にいる松吉に向かって怒ったようにしゃべります。

「松、具合はどうだい、今度ちゃんとお医者様に診てもらったらいのに。まあ、そんな金があったらどうせ酒につかちまうんだろうけどねえ。

今夜また煮つころがし持ってきてやつから、そんなやくざの出入りみたいな三味弾いてないで、ちゃんとおとなしく養生すんだよ」

と、意味ありげにおみつと松吉を交互に見ると、「まったく、赤ん坊が寝やしない」と捨て台詞を吐きながら庭先にある洗濯場に赤児と共にすたすたと行つてしまします。

開けっ放しの引き戸をあいだに、おみつと松吉がとり残されます。

「なんか俺に用かい」

松吉が寢床の上で、三味線を膝の上に置いたまま、はだけた胸元を直しながらたずねますが、おみつに答えられる筈もなく、それでなくとも初めて間近で見る松吉の着物が寝乱れておりまして一層ドキドキしてまいります。

ただ顔を赤らめて黙っているおみつにらちがあかないと思つたのか、松吉は目を三味線に落とすし、先ほどの曲の続きを弾き始めますと、庭先に散つた桜の花びらが、つむじ風に舞い上がり松吉の部屋の中に吹き込んでまいります。

一瞬の桜吹雪の中、松吉は構わずに三味線を弾き続けますと、おみつには、それはまるで歌舞伎の大舞台のようで、使いの途中だったこともすっかり忘れ、その激しくも美しい手さばきに息をするのも忘れて見とれるのでございしました。

桜舞う中、まるでその花びらが染め込まれたかのような頬で、取り憑かれたように聞き入っているおみつに触発されたのか、松吉の三味線にもだんだんと熱が入り、とても病床の演奏とは思えなくなつてまいります。

いくときほど経つたでありましょうか、二人はそのままどこか別の世界へ、すっぽり

と入ってしまったかのようにありました。

先ほどの赤児の泣き声が、突然二人を現実の世界に呼び戻すように洗濯場から聞こえてきますと、それが終演の合図とばかり、松吉はゆっくりと音を止めます。

体中には汗が吹き出しております。

そしておみつもまた松吉以上に汗だくになっているのでございます。

「三味、好きなのかい」

松吉が、湯気が立ちのぼりそうな三味線を脇に置き、汗をぬぐいながら部屋の外で立ちっぱなしのおみつに声をかけますと、おみつも火照った顔をこくりとうなずかせます。

頬の汗に張り付いていた桜の花びらが、一枚ひらひらと落ちてゆきます。

そんなおみつを見て、松吉は少し微笑んだようでございます。

このとき、おみつ十六歳、松吉二十四歳の春でございます。

さて、この後この二人がどうあいなったのか、まことに申し訳ございませんが皆様のご想像にお任せするいたしましたして、このあたりでひとまず江戸の春の一幕、一旦降ろさせていただきますたく存じます。

失礼して、ごめんくださいませ。

三三三。

幕

